

■原著■

野口芳宏氏の「国語」授業研究(1)

————— 「うとてとこ」(谷川俊太郎)の場合(その1) —————

望月善次*

(1989年1月20日受理)

Yoshitsugu MOCHIZUKI

A Study of Yoshihiro NOGUCHI's Japanese Instruction : A Case Study of "UTOTETOKO"
by Shuntaro TANIKAWA

野口芳宏氏(木更津市立波岡小学校教頭)は、授業の名手として名高い。野口氏の(「国語」)授業力の考察は、生成途上にある国語科授業研究の上に示唆するところ大きいのではないかと考えられる。氏の授業力の「構造」を明らかにし、それに基づいた「国語科教師教育教程」を作成しようとするのが、野口氏の授業を考察しようとする筆者の全体構想である。今回は、それに至る一つの道程として、氏の授業の中でも著名なものの一つである「うとてとこ」(谷川俊太郎)についての第1回の考察を行う。許された誌面の関係から、「授業記録」の提出がその中心的作業となる。

[キーワード] 教師教育、国語科授業研究、文学教育、詩歌教育、朗読

I. 野口芳宏「国語」授業研究の契機

野口芳宏氏の「授業」力に関する評価は高い。例えば、近年の教育界の一つの話題である「教育技術の法則化運動」のリーダー向山洋一氏は「私からみれば、野口芳宏氏は文句なしに全国のトップクラスの授業者である」〔4, p. 218〕という。

しかし、野口氏の力量は、「教育技術の法則化運動」という一つの運動体を超える存在ではないのか、というのが筆者数年の思いであった。第2

回日本教育技術学会(1988・11・26~27, 千葉大学)で、初めて直接氏に接する機会に恵まれ、この思いは一つの確信にまで至った。勿論、こうした筆者の「確信」は、これだけでは客観性のあるものとは言えない。この「確信」に客観性を与えることが、筆者の以後数年の仕事ではないかと考えている。

今回は、そうした氏の授業の中から「うとてとこ」(谷川俊太郎)の場合を取り上げ、考察することとする。尚、発表誌面の制約があり、今回は、

* 岩手大学教育学部国語科

そのうちの授業記録の提出が中心となる。

II. 野口実践における「うとてとこ」

「うとてとこ」は、野口実践の中でも人口に膾炙している実践である。「教育技術の法則化運動 第1回二十代講座」〔1985・5・3～5, 東京コマ旅行会館〕における「模擬授業」が、広く知られる一つの契機になったようである。〔6, p. 30など〕

その印象は、余程強烈であったらしく、約一年後の西尾一氏の整理でも、既に次の四「『追試』実践」が挙げられているほどである。〔3, p. 26〕

板倉弘幸「文章を検討させる発問 —— (低学年)『うとてとこ』文章を検討させる発問」, 『国語教育』No.359 (明治図書)。下線=ママ
西川満智子「『うとてとこ』の詩を追試する」, 『授業研究』No.287 (明治図書)。「大森修「添削指導による実践研究論文の書き方」)
石橋卓「うとてとこ —— 野口実践の追試」, 『第二期教育技術の法則化運動 24』(明治図書)。

佐々木俊幸「うとてとこ」, 『学級通信 PTC IV』十八号

また、野口氏御自身にも、最も直接的には西川満智子氏に答えることを明記した〔6, pp. 30～31〕報告「子どもたちはこんなに動く=原実践『うとてとこ』」〔6, pp. 30～56〕がある。

こうした点からすると、野口氏の「うとてとこ」実践については、既に相当程度論じられているということが出来る。¹⁾しかし、こうした実態にもかかわらず、今までのところ氏の「うとてとこ」実践は完全な授業記録復元という形では報告はされていない。

「野口芳宏授業研究」の第一歩として、「うとてとこ」実践の(望み得る範囲での)完全復元を

目指す。これが本論の最も直接的目標である。

ところで、本論において考察を加えようとする「うとてとこ」実践は、上記「第一回「教育技術の法則化運動 二十代講座」のものでもないし、6に挙げられている実践とも異なる。その授業概略は後(IV)に記した通りであるが、前記二つの授業とは別の授業のVTRを野口氏から拝借・視聴したものである。氏の格別の御厚意に対して改めて感謝したい。

尚、野口氏御自身の言によると、本論で対象にしようとする実践と、6とは、授業の狙い等、基本的にはほとんど変わらないものだということがあった。

III. 「授業記録」の在り方

「うとてとこ」の授業記録の実際を示す前に筆者の「授業記録」観の概略を示しておくこととする。

ところで、昨年(1988年)の11月に、千葉大学で行われた第2回日本教育技術学会における「課題研究」の一つは、「実践記録の記述の仕方」であった。

提案者は、藤岡信勝(東京大学)、斎藤勉(新潟大学)、岩下修(名古屋市立筒井小学校)の三氏であった。「T-C型授業記録」を否定し「授業批評型」の授業記録を提唱された藤岡氏の提案等²⁾刺激的な内容なものであったが、本論においては、その詳細を述べる余裕はない。

しかし、とにかく、こうした「課題研究」の設定それ自身が、「実践記録」や「授業記録」の在り方が、依然として生成過程にあるのだということの象徴的事例であると解釈できるという点までは言っておいてよいことであろう。

許されている誌面の問題がある。ここでは、その席上でも発言した筆者の「授業記録の条件」を結論的に述べておくこととする。

① 「実践記録」には、いくつかのレベルが考え

られる。そのことについては、坂元昂氏の考察〔1〕が現在においても有効である。

② どういう形の記録が望ましいかに関して、< 発表の「場」>という条件を欠落させてはならない。誌面や時間の制約の厳しい場合と、それらの緩い場合とを同一に論ずることは不可能である。

③ 制約が緩い場合であれば、次の条件が満たされることが望ましい。

イ) 学習指導案(その授業提案に新しさがある場合においては、そのことが「指導の手段・方法」と共に具体的に提示されていることが望ましい)の添付。³⁾

ロ) 教師・生徒の遣り取りの言葉は、正確に再現する。

ハ) 主たる点においては、教師の授業意図がつけられていること。(第三者のコメント・及びそれに対する授業者の再コメントが付けられれば尚可)。⁴⁾

ニ) 時間の経過を入れる。ある側面から言えば「授業は時間との闘いである。」つまり、経過時間のない授業記録の信頼度はそうした点からも低い、という立場が筆者の立場である。

今回の授業記録も以上の原則に立つことを志向するものであることを明示しておきたい。

尚、国語科教育学における「授業記録」考察についても、以下二点に限定して結論的に言及しておきたい。

① 国語科教育学における「授業記録」についての本格的考察は行われていない。

② 渋谷孝氏等の努力により、「授業の“まるごとの記録”」〔5, p. 2 他〕が、出版レベルにおいても散見されるようになった。しかし、「“まるごとの記録”」と言って多くの場合は誌面の制約から、相当制約されたものとならざ

るを得ないのが現状なのである。〔5, pp. 217~218〕

IV. 授業の概要

今回考察対象とする授業と、6で紹介されている授業とは基本的には差がないという野口氏の言に従うならば、授業の概要を以下の通りとすることが出来る。

日時=1985・7・17(金)

場所=千葉県木更津市立西清(さいせい)小学校
4年1組多田元樹学級

教材=「うとてとこ」(谷川俊太郎)

授業者=野口芳宏(同小学校教頭、飛び入り授業)

授業目標=〔6, pp. 39~40〕

1 ことばのおもしろさ、楽しさに気づき、朗読を楽しむことができる。

2 上手に朗読が出来る。

3 ことばのひびき、リズム、意味などの美しさを味わい、ことばに対する感覚を育てる。

授業意図〔6, p. 40〕

朗読を上手にするためには、本文の意図、意味を的確に理解し、そこに漂っている情趣をとらえることが前提となる。それらにふさわしく緩急、強弱、遅速、大小、軽重をうまく表現していくことが大切である。そのような授業にしたい。

V. 授業の実際

野口氏の厚意によるVTを、岩手大学教育学部国語科教育研究室昭和63年度2・3年次生(伊藤功・及川圭子・及川敏枝・照井有子・大道直子・菊池由美)と筆者とが視聴し、それによって文字に起こしたものである。事後、野口氏にも一応の閲覧を乞うているが、その責はあくまでも筆者にある。

また、そのVTは、これまた野口氏の厚意により、岩手大学教育学部附属教育工学センターにも

所蔵されることになった。今回の記録は、これによったものである。

T₁ 野口先生の大好きな、じとじとじとと雨の降る梅雨が終わって素晴らしい夏が来たね。いい夏を過ごしたいですねえ。〔「うん」の声〕さて、この時間は詩の勉強だ。〔「詩～」の声〕うん、ちょっと風変わりな詩を……、いいかなあ。〔「う」と板書〕一緒に読んでごらん。

C₁ 「う」

T₂ 立派、立派、これだけ読めれば大したものだ。〔笑い。「うとてとこ」と一字ずつ読む〕

T₃ はい、一緒に読んでごらん。はい、S君読んでごらん。

C₂ 〔S君立ち始める〕

T₄ 座ってたままでよい。

C₃ 〔S君読む。〕

T₅ 〔頭を撫でながら〕「うまいじゃん。」

T₆ 〔隣の女子生徒を覗きこみながら〕Kさん、読んでごらん。

C₄ 〔読む。〕

T₇ 〔次の男子を指名〕

C₅ 〔読む、声が小さい〕

T₈ 「うとてとと？」もう少し大きな声で、胸を張って。

C₆ 〔読む〕

T₉ 元気がないね。隣、元気を出して。

C₇ 〔読む〕もっと、でっかく。〔更に、声を張り上げる〕もっと、でっかく。〔全部で五回繰り返す〕うまい。そういう風を読む。次。

C₈ 〔男子読む〕

T₁₀ 元気がない。もっと、でっかく。

C₉ 〔読み直す〕

T₁₁ 〔女子に〕隣り。

C₁₀ 〔読む〕

T₁₂ よし。もっと大きな声で。

C₁₁ 〔読む〕

T₁₃ よし。はい。

C₁₂ 〔男子〕

T₁₄ お〜。一番よかった。もっと、でっかい声で。〔読む〕よ〜し、もっとでっかい声で。

〔声を張り上げる。全員拍手。〕それ位の元気がなくちゃ駄目だなあ。はい、一緒に読んでごらん。

C₁₃ 〔全員で読む〕

T₁₅ 一緒に読む時は、小さい声で読む。

C₁₄ 〔全員読む〕

T₁₆ 一人で読む時は大きい声で読む。〔笑い〕

T₁₇ もう一度全体で。はい。

C₁₅ 〔読む〕

T₁₈ はい、一人で読んでごらん。〔指名読み〕

C₁₆ 〔読む〕

T₁₉ こういうのが上手なの。はい。

C₁₇ 〔読む〕

T₂₀ 何のこっちゃ、お前。

C₁₈ 〔男子、「うとてとこ」と読む〕

T₂₁ そうじゃねえんだよ。何のことだ、これは。何のことだ。これは。わからない？。〔全員に対して〕何のことだか、わかんない人。

C₁₉ 〔ほとんど全員挙手〕

T₂₂ 凄い。このね、いいかい。今、手を挙げている人。何のことだか分からない。これがね、素晴らしいんだよ。〔笑い〕これが分かるぞ、今日。授業中に。〔3分経過〕ああそうか、そうだなあ、20分位たつと分る。〔笑い〕楽しみだろう。〔「うん」の声〕〔挙手をやめさせながら〕なあ、はい、下ろして。

T₂₃ 〔「うとうとうとう」と板書。子供達は自然に読み始める〕一緒に読んでごらん。はい。

C₂₀ 〔子供達読む。授業者はチョークを持った右手で、リズムをとる。〕

T₂₄ もう一回、はい。

C₂₁ 〔読む〕

T₂₅ 何のことだか分る。分かんない人？

C₂₂ 〔挙手多数〕

T₂₆ 素敵だねえ。分かんないってことが自分で分るってのは、凄くいいことなんだ。

今手をあげていない人、手を挙げて。その人は分るって人だ。立ってみて。

C₂₃ 〔立つ〕

T₂₇ 〔女子の一人に〕何のことだろう。

C₂₄ 腕。腕の「う」。

T₂₈ 腕のこと。

C₂₅ 腕の「う」

T₂₉ 腕の「う」。分かった人、なんだか。何言ってるんだか？

C₂₆ 〔挙手なし〕

T₃₀ 分かんない人。

C₂₇ 〔挙手多数〕

T₃₁ 分からないってことが分るのは凄くいいことなんだ。だから、分からない時に手を上げるのをびくびくしちゃあ駄目なんだ。

T₃₂ 〔発言した女子に〕ちょっとよく分からないかなあ。〔男子を指名して〕はい。

C₂₈ 鳥の鶺鴒。鳥の鶺鴒、あの。…

T₃₃ すごい勘だな。そうかも知れないなあ。

「鶺鴒と鶺鴒と鶺鴒と鶺鴒」のことかもしれないなあ。凄くいいなあ、〔名札を確認しながら〕Sくん。君の勘は凄くいいぞ。〔頭の撫でながら、次の男子を指名〕はい。何だと思った。

C₂₉ 分からなくなっちゃった。詩だとは思ったけれど。何だとは思ってはいない。

T₃₄ 何だと思うかと聞いてんだから、何だと分かんないなら分かんねえって言え。

はい、よーし〔次の男子を指名〕

C₃₀ 「うとうと」と歩いている。

T₃₅ うとうとと歩いている？

T₃₆ 分る人？

C₃₁ 〔挙手なし。「うとうと？」などのつぶやき〕

T₃₇ 〔再度〕うとうとと歩く？

C₃₂ 〔「てくてく歩く」など〕

T₃₈ うとうとと眠くなるなら分るな。次へ行こう。

これを書くと、ははあということになるんだよな。

〔「う」と書いて、一旦子供の方を見る。そして続けると生徒は自然と読みだす。「分かった、分かった」のつぶやきも〕

T₃₉ あっ分かった、あっ分かった、あっ分かったっていう人？

〔「鶺鴒という鳥」というつぶやきなど。〕

T₄₀ 〔女子に〕何という鳥だ。

C₃₃ 〔「同じで一す」の声〕

T₄₁ 何ていう鳥だ。

C₃₄ わかんない。〔6分経過〕

T₄₂ わかんないの？〔中腰になりながら〕そこが分かんないけりゃあ。〔男子の「分る分る」の声〕

C₃₅ 鶺鴒という鳥

T₄₃ 鶺鴒という鳥が四羽いる。〔教室の中を広く指しながら「うとうとうとう うがよんわ」と読む〕

T₄₄ 分かった。はい、分かったっていう人。

C₃₆ 〔挙手多数〕

T₄₅ 凄くいいなあ。さっき分からないって言って手を挙げた人が、今度は分かるって言って手を上げている。これがお勉強なのね。分からなかったところが分る。凄くいい。おめでとう。一緒に読んでみよう。はい。

C₃₇ 〔読む（声が小さい）〕

T₄₆ 下手だね。もう少し大きな声で読もうか。

C₃₈ 〔読む〕

T₄₇ うまい。〔「うとうとうとうと」と板書〕何のことだかろうか。分かった人。

C₃₉ 〔挙手なし、（想像できる）〕

T₄₈ また分かんなくなった人？

C₄₀ 〔挙手多数〕

T₄₉ いいねえ。よーし。下ろして。

分りたかった、分かった、また分かんなくなった。また、分る。分るぞ。次の一行で。〔間をおいて〕何？何だって、ちょっと読んでごらん。

C₄₀ [男子, 読む] うとうとしている。
T₅₀ [「いねむりだ」と板書]
C₄₁ あっ, 分かった。居眠りかア
T₅₁ 分かったという人?
C₄₂ [挙手多数]
T₅₂ 結構じゃん。どうだ面白いだろう。〔「うん」の声など〕
T₅₃ 分からなかったものが分る。分からなくなったものが〔分るのシեսチャーをする〕最初から読んでみようか。ここから。はい。
C₄₃ [全体で一連を読む]
T₅₄ 今度は, 一人ずつねえ, 読んでもらうのでねえ, この読み方は, 僕の最高の読み方, これは私の最高の読み方だ。よ〜く考えて, 上手に読む。
今までみなさんが読んだのは, つかえないだけで, 下手。上手に読んでいる人はいない。今度は上手に読んでもらう。
こうやって読めば, 上手だというふうに読んでもらう。〔9分経過〕全部の人に。
〔女子に〕素敵なおべべを着ているSさん。はい, 読んでごらん。最初, 一行目から。
C₄₄ [女子, 読む]
T₅₅ 今のは○, △, ×。どれかな。〔「×」の声〕
T₅₆ [次を指名] よーし。〔前の子供の頭を撫でて〕次は, ○か△か×か?
C₄₅ [男子, 読む]
T₅₇ もう一人Iさん。
C₄₆ [女子, 読む]
T₅₈ 三人とも, つかえたりしなかったねえ。〔「うん」の声〕でもね, つかえなければいいというもんじゃあない。つまり, この詩の仕組みに合わせて読まなくちゃいけない。どうやって読んだらいいか分からない人。
C₄₇ [挙手多数]
T₅₉ 分かんねえだろう。では, ヒントです。
前の半分をAと名前をつけるぞ。後の半分を

Bと名前をつける。AとBは同じ読み方でいいのか, 違えて読んだ方がいいのか。同じ読み方でいいんだ, AもBも同じ調子で読めばいいんだと思う人はノートに○。いや, AとBは変えて読まなくちゃいけないんだと思う人はノートに×。〔12分経過〕
未だ書かない人。
C₄₈ [何人が挙手]
T₆₀ 遅いぞ。未だ書かない人。いないなあ。
必ずどっかに手をあげてみて。必ずどっかに手をあげてみて。いいか。
C₄₉ [はい]
T₆₁ 今度手を上げるのは, もう書いてあるのだから, サッと上げる。こうやって(腕を曲げてみせながら)あげちゃあ駄目だよ。上げ方練習。はい。
C₅₀ [挙手]
T₆₂ 未だ遅いな。もう一回下ろす。
C₅₁ [挙手練習。]
T₆₃ よし。
さあ, 同じに読むんだぞっっちゃうのは○だよ。○をつけた人。
C₅₂ [少数]
T₆₄ パッと上げろって言ったじゃあない。いない? ×の人。
C₅₃ [多数]
T₆₅ おー凄い。勘定出来ない。
何故×だ。この列ずーと聞く。座ったまま。
C₅₄ 同じだと思った。同じだと思った……………
T₆₆ ええか, これから野口先生が時々「何故か」って聞くから。その「何故か」に答えた時に, 脳味噌のしわが一つピュット増える。「何故か」と聞かれた時に, 「何となく」とか, 「分かりません」と逃げちゃうと, 脳味噌がピツとのびちゃってビロビロとなる。「何故か」ときかれたら, 「しめた」と思って考えるんだぞ。本当に。
何故読み方を変えなければならないのか。ハ

- イ。〔と、男子を指名〕
- C₅₅ Aの方は、鵜が四羽で、Bの方は居眠りをしているから。それで、違います。
- T₆₇ どういう風違う。
- C₅₆ Bは居眠りして時いるみたいで、Aの方は、鵜が本当にいるみたい。
- T₆₈ 鵜が本当にいるような読み方と居眠りをしている読み方と、どう違うのか。
- C₅₇ 点がないけど、切り方が違う。
- T₆₉ 切り方が違う。どう、切り方が違う？
- C₅₈ あれに点を打つんだったら、点の打つ場所が違う。〔15分経過〕
- T₇₀ どういう風違う。
- C₅₉ 「うがよんわ」は、「と」の下に一つずつ付けたり、「いねむり」は「うとうと」って二つずつ付けたり……………
- T₇₁ 今、言ったことが分かった人。
- C₆₀ 〔挙手多数〕
- T₇₂ よし、君の名前は。
- C₆₁ S。
- T₇₃ S君。S君は、さ、こう言ったんだ。〔板書で確認しながら。読んでみせる。〕なるほどと思う人。
- C₆₂ 〔挙手多数〕
- T₇₄ 一つ分かった。Sの頭の皺は皺だらけになった。〔撫でる〕
- T₇₅ Kさん、何で読み方を変えたの。
- C₆₂ Bの方は何か、居眠りみたいで、隣の方に書いちゃって、Aの方は、鵜が四羽で鳥みたいだから、何か読み方違うと思います。
- T₇₆ だから、それによってどういう風に変えるか。例えば、こっちはでっかく読むとか、こっちは小さく読むとか。こっちは、怒って読むとか、こっちは笑いながら読むとか、そういう風に、AとBの読み方が違う理由を言ってごらん。
- C₆₃ Aの方は眠そうに。
- T₇₇ だから、眠そうに読むっていうのはどうやって読めば眠そうになる。
- 声の大きさは？眠そうに読めたってさあ読めない。どうして、どういう風に変える。
- C₆₄ 〔女子答えず〕
- T₇₈ よし、何かあるか。次。〔男子に〕
 恰好いいヘアスタイルだなあ。〔頭を撫でながら〕喧嘩でもやりそうじゃん。
 〔名前を見ようと名札を確認しようとする、男子名札を隠す〕
 分からねえぞ。
 なあ、どう違う。AとB
- C₆₅ 大体同じだと思う。
- T₇₉ 同じだっていう理由。
- C₆₆ 〔答えず。〕
- T₈₀ よし、全体に聞く。誰か分かる人。はい。
 〔前の生徒の頭を撫でながら〕分る人？ AとBをどうこう変えたらどうか。
- C₆₇ 〔何人か挙手〕
- T₈₁ よし、今手を挙げている人は偉い。考えていることが違っているかもしれないけど偉い。
 とにかく、やってみようと思うことが偉い。やって見ようと思う人。ねえ、立ってごらん。
- C₆₈ 〔立つ〕
- T₈₂ はい、発言したら座る、こっちから。短く、はい。AとBの読み方の違いです。
 はい。〔18分経過〕
- C₆₉ Aというのは、「うとうとうとう」だから、鳥がいるんだから、大きな声で読み、でもBは、居眠りなんだから、ゆっくりと、小さい声で読むと思います。
- T₈₃ 分かった人
- C₇₀ 〔挙手〕
- T₈₄ よし、降ろして。そうだと思う人。
- C₇₁ 〔挙手多数〕
- T₈₅ なるほどなあ。〔次の生徒を指名〕
- T₈₆ 同じこと？じゃあ、同じことだったら座りなさい。
 ああ、こんなに沢山同じ人がいる。
- T₈₇ 名前は？Aさん？Aさんと同じ人が一杯い

たね。同じようことを考えているんだね。じゃあ、今度は違うんだな。S君は、はい。

C₇₂ 鶴が四羽だから、びっくりしているように大きい声で言って、Bの方は居眠りだから、静かに眠っているんだから、少し小さい声で読む。

T₈₈ なるほどなと思う人はノートに○、おかし
いんじゃないの、と思う人は、×。
×書いた人。

C₇₃ [少数]

T₈₉ ○書いた人。

C₇₄ [多数]

T₉₀ よし、Sの考えはこんなに皆に支持されて
いる。見回してみろ。全部手を上げている。い
い気持ちだろう。

よし、素敵ない見をありがとう。Yちゃん。

C₇₅ はい。Aの方はS君と同じで、あの鳥が……
……………

T₉₁ 同じことは言わなくていい。違うことを。

C₇₆ Bの方が違って、私はAさんと反対で、
「うとうと」しているから「うとうとうと」っ
てしてる、してて小さな声で早く言うと思いま
す。

T₉₂ さあ、ここを決めなくちゃあ。

Aさんは、「うとうとうとうと」とゆっくり
読む。Yさんは、「うとうとうとうと」と速く
読む。小さく読むのは同じだ。どっちだなあ。

それは速く読むんだよって言う人は、ノート
に「は」、いやあ、それはゆっくり読むんだよ
って言う人はノートに「ゆ」。(21分経過)

「は」か「ゆ」か、どっちか書くんぞ。

「へ」なんて書くんじゃあねえぞ。(笑い) 書
かない人いないな。

よーし、さあ、どっち大きくなる方かなあ。
「は組」。

C₇₇ [挙手四人]

T₉₃ ははあ、四人。「ゆ組」。

C₇₈ [多数]

T₉₄ よし。こりゃあ、一杯だ。どっちが、いい

か比べてみよう。

では、「ゆ組」、あ、
「は組」。

「は組」で手を上げた人もう一度。K君。K
君。「は組」の代表だ。

こっちの方速く読んでみよう。つまり、君の考
えるようにこれ読んでごらん。

さあ、行こう、はい。

C₇₉ [読む]

T₉₅ うん。もう一度やり直し。ちっとも速くね
えじゃあねえ。

C₈₀ [読む]

T₉₅ よし、Yさん。あなたの理想的な読み方読
んでみよう。

C₈₁ [読む]

T₉₇ なるほど、その方がいいと思う人いるかな。

C₈₂ [挙手なし]

T₉₈ やっぱり駄目だよって言う人。

C₈₃ [挙手多数]

T₉₉ じゃあ、「やっぱり駄目だよ」の代表で誰
か読んでもらうかな。

こうやって読むんだよ、って。一番後ろの、
誰か。

T君。よし、代表だ。ゆっきりの代表だ。

C₈₄ [読む]

T₁₀₀ 今の読み方で、ちょっと気がついたことを
発言したい人いますか。

それじゃあ、S、立って言ってみろ。

C₈₅ [女子発言]

T₁₀₁ T君の読み方は、Bの一番最初の「うとう
とうと」の最後に「う」が付いちゃったからそ
の読み方は違うと思います。

他のことで何か。Tの読み方は違うっていう
のは。

C₈₆ T君のは全然休まないでそのまま読んで
ったから。(24分経過)

今先生が言っているのは、AとBの読み方の
違いなんだぞ。Tの今の読み方っていうのは全

体をゆっくり読んだんだろ。そうじゃあないんだ。そうじゃあないよね。

あなた、どう読むか。〔女子指名〕こういう風に読むんだよって。はい。

はい、読んでごらん。

C₈₇ 〔読む〕

T₁₀₂ 今のは、Aを普通に読んでBをゆっくり読んだよ、ね。

ちょっと、AとBの読み方をどう変えるか。

はい、最後の人ですね。

C₈₈ 私は、Aの方は「うとうとうとう」というのは、一匹ずつだから全部を纏めて読まないで、Bの方は「うとうとうとうと」、切っちゃったら、居眠りじゃあなくて、あの、なんか変なになっちゃうから、「うとうとうとうと居眠りだ」というのが、ゆっくり太い声で眠たい、太い声っていうかがガラガラ声っていうか、変な。

T₁₀₃ ガーガー〔笑い〕

C₈₉ 違う、太い、小さい。

C₉₀ 太い、小さい？

T₁₀₄ うん、なんて言うか。

C₉₁ 〔笑い。「やさしい声で」のもあり〕

そんな怖い声じゃあなくて、なんか変な声。

T₁₀₅ 変な声でやるのか。〔「ゆったりと」など〕

C₉₂ そういう声で、ゆったりと本当に眠ったそうな声で、ゆったりとゆっくり「いねむり」。「うとうとうとうと」って読んだ方がいいと思います。

T₁₀₆ なるほど。〔「なるほど」の声〕凄く一杯あるって……………ちょっと整理してみようねえ。

先生は、今から黒板に整理するけども、あなたの方の頭の中でどの位AとBの読み方の違いが整理されているかなあ。〔27分経過〕

Aは区切って。Bは続けて。Aは、はっきり。こっちはなめらかに。これは普通に、これはやや速く。もう一度Bで、こっちは「は」、速く

は駄目なんだったよね。これは、ゆっくり。これでいいのかな。今まで出たのは。この六つぐらいかなあ。他無かったか。

野口先生落としているの。無いか。

それでは、Aの方は区切って、はっきり、普通の速さ、Bは、続けて、なめらかに、ゆっくり、読む。

それじゃあ、そうやって自分自分で三回ずつ自由に声出して練習。隣と相談したり、一緒になったりしないように。はい。声を出して。

〔黒板を指しながら〕これを頭において、ちゃんとそういう風を読んで見る。はい、始め。

C₉₃ 〔読む〕

T₁₀₇ うまくいった人。

C₉₄ 〔男子挙手〕

T₁₀₈ よし。いい度胸だ。子供というものはそうでなくちゃあいけない。名前は？H君。

やあ、H君をご紹介します。〔拍手〕頑張れ。ほら、頑張るんだぞ。

C₉₅ やりにくい。

T₁₀₉ やりにくい？何言ってんだ、お前。はい、頑張って、ほら。

C₉₆ 読むの？

T₁₁₀ そうだ。さあ、ぴんと立って。

C₉₇ Aの方は……。

T₁₁₁ 「Aの方は」じゃあねえんだ。読んでみよう。

C₉₈ 〔読む〕

T₁₁₂ うまかったと思う人。

C₉₉ 〔挙手なし〕

T₁₁₃ あんまりうまくなかったと思う人。

C₁₀₀ 〔挙手、多数〕

T₁₁₄ よし。うまく、読め。

C₁₀₁ 〔指名〕

C₁₀₂ え～。え～〔30分経過〕

T₁₁₅ え、じゃないんだ。はい。

C₁₀₃ え～とね。うーと

T₁₁₆ うーと？

C₁₀₄ 間違っちゃった。

T₁₁₇ はい、最初から。

C₁₀₅ [読む]

T₁₁₈ すごく、うまかったと思う人。

C₁₀₆ [自分のみ挙手]

T₁₁₉ あんまりうまくなかったと思う人。

C₁₀₇ [挙手多数]

T₁₂₀ 難しいなあ。よし。

なかなかね。この、こういうことを言葉でね。かっこよく言うのはやさしいけども、そうやって読んでみろっていうとなかなか難しいんだ。

先に進んでもう一度読み直すことにしよう。次。[「てとてとてとて」と板書]

はい。読んでごらん。

C₁₀₈ [読む]

T₁₂₁ なんのことだか分かるか。

さっきより、こっちの方が見当がつくな。

[「つく」の声]

分かんない人?なんのことだか分かんない人? [何人か挙手]

T₁₂₂ よし、じゃあ全部分るんだな。H君。

C₁₀₉ 手。

T₁₂₃ あー、これか。handか。[自分の腕を指す] そうだと思う人?

C₁₁₀ [挙手多数]

そうだね。[子供の手を触っていきながら] 「てとてとてとて」

[板書] はい。一緒に読んで。

C₁₁₁ [読む]

T₁₂₄ あー。分かったかな。[「てとてとてとて」と板書]

はい。なんのことだか分んない人?

C₁₁₂ [挙手多数]

T₁₂₅ おめでとう。分かんない方が、面白いんだよ。次、すぐ分る。次の一行ですぐ分る。

「いねむりだ」か?なんだろうねえ。

[「らっぱふく」と板書] これ何だ? 音。らっぱの音。

C₁₁₃ 違うよ。

T₁₂₆ 違う?

C₁₁₄ だって、らっぱの音ってもっと違う音だもん。

T₁₂₇ どんな音

C₁₁₅ てとー、てとー。[33分経過] なんだったけ。忘れちゃったけど、ね、とにかく、そういう音じゃないよ。

T₁₂₈ いや、だけどさ。これ子供のらっぱだと大丈夫か?

C₁₁₆ うん。ある、ある。

T₁₂₉ これは、らっぱの音です。「てとてとてとてとらっぱふく」

はい、最初から行こう。はい。

C₁₁₇ [読む]

T₁₃₀ 次に出す質問はすごく難しい。いいか。これをAとする。これをまたBとする。いいか。そうして、ここで言ったこと[板書を指す]つまり、区切って、はっきり、ふつう、続けて、なめらかに、ゆっくりというのか。

こっちを第一連という。一連。一緒に言ってごらん。

C₁₁₈ [読む]

T₁₃₁ これを第二連という。言ってごらん。

C₁₁₉ [読む]

T₁₃₂ 一連で、あてはまった読み方が、二連でもあてはまる、と思う人が○。いや、一連で、区切って、はっきり、ふつう。ここを区切って、はっきり、ふつう。こっちは続けて、なめらかに、ゆっくりというのが当てはまらない。一連と二連の読み方は全然違う、と思う人は×だ。

これは相当難しい。さー、どうだ。書かない人?

C₁₂₀ [挙手多数]

T₁₃₃ はい。下ろす。

そして必ず「何故か」と聞かれるからな。だから聞かれたことをもう準備してなくちゃ駄目だよ。書きちゃったなんて。そらみたことか、

というのはね。そら、駄目だ。次のことを考えとくんだ。

さてどうかな。書かない人いないね。書いたね。

あてはまる。〔自分でも挙手しながら〕○。

C₁₂₁ 〔挙手〕

T₁₃₄ ぴしっとやれ。よーし。理想的だ。〔36分経過〕まだ手を挙げてて。〔人数を数える〕14人。〔板書〕

それは同じだという人。ね、よーし。×つけた人。

C₁₂₂ 〔挙手〕

T₁₃₅ 〔板書〕26人。さあ、これは難しい。それで、どちらかが合っている？

どちらかが、全く合っている。どちらかが、全く違っている。さあ、そこでだ。

同じだよ、という人はノートに、違うよって人はノートに、その訳を一つずつ、すぐ書く。この一言を言えば相手をぶちのめせるということを書く。

これを僕が言えば相手は参っちゃうなというのを一つ書く。二つ書いたり、三つ書いたりしては駄目、一つ。

〔ノート作業、机間巡視〕

T₁₃₆ 凄い。ノート作業のスピードが速い。大したものだ。頭の中が整理されている人はすぐ書ける。〔39分経過〕

T₁₃₇ よおし、よく書いた。偉い。立派だ、よく書いた。

こういう風に、何故かという時にこれに答えられるってことはね、凄く大事なことなんだよ。脳味噌を、脳味噌をよくするんだよ。ちょっと、そのノート、そのまま大事にしておこう。

全然別なことを聞こう。

一連、二連とこの詩を書きました。この詩はこれで終わるかしら。それともこれで終わるだろうか。続くって思う人は、「つ」。終わりって思う人は「お」。どちらかだよ。「つ」か

「お」かだよ。

さあ、聞いてよみう。書かない人。

C₁₂₃ 〔挙手なし〕

T₁₃₈ はい、大したものだ。書くだけは……

「お」

C₁₂₄ 〔挙手なし〕

T₁₃₉ はい、「つ」

C₁₂₅ 〔ほとんど全員〕

T₁₄₀ 「どっちかだと思う人」(不明)「つ」の理由が言える人。つまり、なぜ、「つ」なのか、なぜ続くのか。

C₁₂₆ 〔挙手〕

T₁₄₁ よし。下ろせ。

「つ」と書いたけど、理由が言えない人、手を挙げて。その人立って。

C₁₂₇ 〔立つ〕

T₁₄₂ 今から野口先生があなた方をいじめるから。〔「え～」の声〕

あなた方はね、「つ」と書いた。だけど、理由が分からない。そういう勉強の仕方じゃあ駄目なんだ。

何故「つ」と書いた。〔男子指名〕

C₁₂₈ ……。

T₁₄₃ ううん、……じゃあない。なぜだ。〔42分〕

C₁₂₉ 何となく二つ繋がったから、どっかで繋がるんじゃないかと……。

T₁₄₄ 感じだな。それもいいけど、それだけで終わっては駄目だ。何故、繋がったのかということをも自分で考えてみなければ勉強にならない。

〔男子指名〕

〔答えずにいると〕出鱈目か。出鱈目じゃない。

C₁₃₀ 〔頷く〕

T₁₄₅ 出来るだけ理由をもって判断しなけりゃあ駄目だ。〔女子指名〕

C₁₃₁ 何となく「てとてと」言葉が出来たから、違う言葉でも出来るんじゃないかと……。

T₁₄₆ [男子指名。鼻に触りながら] 一連、二連
あったんだから三連や四連や五連もあると思
います。

T₁₄₇ 三連や四連や五連があると思う。何故、
思う。〔終業のチャイム〕

S さん。

C₁₃₂ ……。

T₁₄₈ よおし、今立っている人達……。〔女子を
指名〕

何故「つ」だ。

C₁₃₃ [女子] こちらの方に「うとうとうと」っ
て何だか続くような気がする。

T₁₄₉ みんな、何故だか続くような感じがする。
続くと思う。こうくる。それじゃあ駄目なんだ
よなあ。座っている人はもじもじしている。む
ずむずしている。言いたくて、なっ。

一番後ろ。〔氏名を確認した後〕

S [男子]

C₁₃₄ 始めの一連は、始めの一連は題に「う」
と書いてあって、一連に、始めに「う」とはじ
まって、次に「て」と書いてあって、次の二連
も、始め、今度は「て」と書いてあって、だか
ら、今度は「こ」が始まる。

T₁₅₀ 何故そうだ。

C₁₃₅ あそこの〔黒板の題を指しながら〕「うと
てとこ」だから。

C₁₃₆ 同じで一す。

T₁₅₁ 立っている人。

C₁₃₇ [「三連ある。」という声]

T₁₅₂ [黒板に戻りながら] 「う」と「て」が出
て〔「こ」を指しながら〕これが残っているか
ら「こ」があるはずだ、座っている人。

立って居る人。ああなるほどと思った人、手
を挙げて。〔45分経過。挙手〕それに気がつ
かなけりゃあ駄目なんだ。国語の勉強というも
のは必ず答えが書いてある。

見えなけりゃあ駄目なんだ。見えなけりゃあ。

「こ」があるんだよ、。未だ「う」と「て」し

か出ていないだんもん。

よし。じゃあ、いじめはこの辺にしよう。

〔笑い〕

T₁₅₃ 「こ」は自分で出来るだろう。もう。

〔「ことことことこ」の声〕

一連と二連と来たんだからさあ。出来るだろ
う。はい、作ってみよう。すぐ。

C₁₃₈ [「分かった」の声など]

T₁₅₄ 分かった。作ってみよう。

ちゃんと勘定して間違えないように書くんだ
ぞ。

さあ、うまく作ってみよう。素敵なのを作っ
てみよう。

C₁₃₉ [「出来た」、「まあ、いいや」の声]

T₁₅₅ 出来たじゃん。

C₁₄₀ 「いたい、いたい。」の声。〔☆意味不
明〕

T₁₅₆ ちゃあんと書くんだぞ。

面白いのが一杯あるぞ。面白いのが一杯ある
ぞ。

男だから我慢する。

名前は。SA君起立。その後、Sさんも起立。
いいか、よく聞いて。

SA君の方がよいと思ったら、「〇す」、S
さんの方がいいと思ったら、「〇そ」。

C₁₄₁ [二人、読む。Sさんの途中で48分経
過]

T₁₅₇ 両方歩いているねえ。

それじゃあ、「〇す」か、「〇そ」か。

〔「最初の……」呟き〕

さあどっちな。書いたかなあ。

「〇す」

C₁₄₂ 「〇そ」?

T₁₅₈ 「す」

C₁₄₃ [挙手なしか]

T₁₅₉ 「〇そ」

C₁₄₄ [挙手多数]

T₁₆₀ その次は、何故かと私は必ず聞いていくね。

Aさん。

C₁₄₅ 私は「そ」としました。

T₁₆₁ 「「す」か「そ」かがよく聞きとれないので」「す」?

C₁₄₆ 「そ」

T₁₆₂ 何故だ。

C₁₄₇ それは、SA君は「こが四つ」と言ったけど、「こ」と「よ」がどういう意味が分からないけれど、でもSさんのは子供が四人だと分かったからです。

C₁₄₈ 「同じでーす」の声

T₁₆₃ そそそそう「そ」だよ。〔「ナウイしゃれ」の吹き〕

意味が違うよな。「子が四つ」っていうように「一つ、二つ」って数えないよな。〔笑い〕

「ことことことこ こがよにん ことことことこと」まではいい。最後、最後のところだけ言ってもらおう。〔列を指しながら〕いいか、この列。最後のところだけ。

出来てなかったら、出来ていないって。

〔二人飛ぶ〕

C₁₄₉ 「遊んでいる」

T₁₆₄ 〔黒板を指しながら〕これと同じだ。さっき「歩いている」だったけ。

座ったままでいい。

C₁₅₀ 「転がろう」〔笑い〕

T₁₆₅ だから、面白いんだ。「ことことこと ころがろう」子供が四人で。傑作だなあ。

この列いこう。

C₁₅₁ 〔三人飛んで、女子〕「下駄の音」

T₁₆₆ 下駄の音。はい。

C₁₅₂ 「歩いている。」〔列が変わる〕

C₁₅₃ 音がする。

T₁₆₇ 「ことことことこと 音がする」

C₁₅₄ 「こまとこまが当たる音」

T₁₆₈ 「ことことことこと こまとこまが当たる音」、最後。

これがいいと思う人○。それは、違うと思う人

×

それで終わりにしよう。はい、○書いた人。

C₁₅₅ 〔挙手〕

T₁₆₉ ×を書いた人。

C₁₅₆ 〔挙手〕

T₁₇₀ ×を書いた人で決定的な理由で相手をぶちのめせる人。〔51分経過〕今の「こまがぶつかる音」ではいけないということを中心に言える人、だ。S。

C₁₅₇ 〔指名された生徒答えず〕

T₁₇₁ はい。〔別の女子指名〕

C₁₅₈ 「ことことことこと こがよにん」というのは、前のは皆「う」や「て」も……でも合うし、居眠りでもあうし、「こまがぶつつかり合う」というのは、音は、全然言葉の詩の、音が、言葉の中の語句みたいなものはみ出してでないし、よく分からないし、両方ともあれば、……のことで書いてあるから、違うと思います。

〔52分経過〕

T₁₇₂ 〔頭に触りながら〕SKさん。この脳味噌の……

よく考えてね。面倒くさがらないで。もう一つ理由がある?

C₁₅₉ うん。

T₁₇₃ 凄えなあ、やってみよう。

「こがよにん」というのは、四人で、独楽を回しているということがまだ入っていない。音だけじゃあ、子が四人で独楽を回しているのか、犬が回っているのか、回っているということは分かるけれど、音だけじゃあ、どうやって回っているのか分かりません。

T₁₇₄ よく出来ました。〔顎を挟む〕

えーと、時間延びちゃったので、ここで終わりにする。残念だけどね。本当はね、上手な読み方まで勉強したいんだけどね、ちょっと、時間がかかりすぎちゃったね。

まあ、しかし、分からないところが段々分かってきたろう。〔「うん」の声〕

どういふことだか、分かってきたらう。

また、やらせてもらうことにしよう。今日は中途半端だったけど、これで終わる。

はい、姿勢を正して。ではお元気でさようなら。でさようなら。

はい。

C158 有り難うございました。

〔53分08秒〕

VI. 終わりに

本小論は、「野口芳宏授業研究」の第1回として、氏の「うとてとこ」（谷川俊太郎）実践の考察を行うべく始めたものである。誌面の制約から、今回は、授業記録の提出が中心とならざるをえなかった。今後、これに、筆者のコメント、野口氏の再コメント、筆者の再コメントなどを付け加えていきたいと考えている。

〔注〕

- 1) これも誌面の制約により、今回は「うとてとこ」の先行研究の詳細について言及している余裕がない。この点は、別稿にて論じる予定である。尚、「うとてとこ」実践に関する野口氏自身の報告の初出は、2〔pp. 78～96〕であるという。
- 2) 藤岡氏による「批評型授業記録」は、VTRを利用した「ストップ・モーション式」との組み合わせになっている。〔「ストップ・モーション式」については、7参照〕
- 3) この部分は、学会当日においては十分に述べることが出来なかった部分である。
- 4) 筆者の場合で言えば、種々の関係から、再コメントのレベル迄実践出来ているのは、学生達との演習レベルの場合に止まっている。

〔引用文献、発行年月順〕

- 1 坂元昂「教育改善に生かす実践記録の読み方」, 『現代教育科学』No.304 (明治図書, 198

2-3)。

- 2 野口芳宏『国語教室 —— 実践ノート第13集 ——』(私家版, 1982-6)。
- 3 西尾一「(野口芳宏氏の「うとてとこ」を追試して 2)『追試』の失敗例からも学べ」, 『現代教育科学』No.357 (明治図書, 1986-8) pp. 28～31。
- 4 向山洋一「教師修行は果てしがなく」, 石岡房子『分析批評で国語科授業が変わった』(明治図書, 1986-8) pp. 216～223。
- 5 渋谷孝・市毛勝雄編著『読みを深める授業分析・2 小学校2年 —— 全授業記録と考察』(明治図書, 1987-4)。
- 6 野口芳宏『子どもを動かす「授業の技術20+α」』(明治図書, 1988-2)。
- 7 藤岡信勝「ビデオをとめて授業の腕を上げよう —— ストップモーション方式による授業研究の提唱 ——」, 『授業づくりネットワーク』No.4 (1988-10) pp. 5～9。